The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	自身の授業を振り返るFDワークショップの実践 : 大阪大学コースデザインワークショップの取り組み
Author(s)	根岸, 千悠; 大山, 牧子; 森, 秀樹 他
Citation	大阪大学高等教育研究. 2015, 3, p. 45-54
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/51486
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

大阪大学高等教育研究　3（2014），45−54

【教育実践レポート】

自身の授業を振り返るFDワークショップの実践

― 大阪大学コースデザインワークショップの取り組み ―

根岸　千悠[※1]・大山　牧子[※1]・森　秀樹[※2]・家島　明彦[※1]・佐藤　浩章[※1]

A Faculty Development Workshop for Reflecting On Your Teaching: The Course Design Workshop at Osaka University

Chiharu NEGISHI[※1], Makiko OYAMA[※1], Hideki MORI[※2], Akihiko IESHIMA[※1], and Hiroaki SATO[※1]

This paper is focused on the three-day Course Design Workshop for faculty at Osaka University. This workshop has been organized by the university's Teaching and Learning Support Center from 2013. We describe the achievements of and problems experienced by this program. According to the results of a questionnaire taken by participants, overall satisfaction with this workshop is high. It was seen as an opportunity to not only reflect on their practice but also develop concrete action plans for improvement of teaching and courses. However, it was also found that this program made it difficult to build lasting relationships between participants. It is necessary to support a community of participants who can communicate with each other. Next, we intend to conduct a follow-up survey to compare the results for these participants with those for participants in two other course design workshops. A comparison of educational effects by participants' levels of teaching experience may also help us provide a program that meets the needs of each participant.

Keywords : Course Design, Faculty Development, Workshop, Teaching

1. 問題と目的

コースデザインとは，教員がある目的に基づいて授業科目（コース）を具体的に設計（デザイン）することであり，到達目標の設定や内容，教育方法，評価方法の計画などが含まれる．いくつかの大学では，より良いコースデザインができるようになるために，レクチャーやワークが織り交ぜられたコースデザインワークショップが実施されている．すでにカナダのマギル大学（McGill University）は20年以上，Course Design and Teaching Workshopを開発し，提供してきた．マギル大学がワークショップをデザインした背景には，次の課題があった（Saroyan et al. 2004）．

・なぜ教授法に関する短いワークショップは，私たち（引用者注：マギル大学のワークショップ開発者．以下同じ）が推進しようとする教育，特に学習を中心とした教育へ変化していかないのか．
・専門分野の中で行われる知識の開発について理解することは，教育実践にどのように影響するのか．
・なぜ一部の大学教員は，教育に関して適切な考えを述べることができるにもかかわらず，理解していることを実践にうつせないのか．
・どのようにすれば，大学教員は専門に関する内容の説明よりも，より学生の学習を重視するよう，私たちは支援できるか．

所　属：[※1]大阪大学教育学習支援センター　[※2]東京工業大学大学マネジメントセンター
Affiliation : [※1]Teaching and Learning Support Center, Osaka University, JAPAN
[※2]University Management Center, Tokyo Institute of Technology, JAPAN
連絡先：chiharun@tlsc.osaka-u.ac.jp（根岸　千悠）

・どのようにすれば，大学教員は自らの教育実践を振り返り，そこから学ぶよう，私たちは促すことができるか.

これまで実施してきたワークショップに対する問題意識から「学習を中心とした教育」(learning-centered teaching）へのパラダイムシフトを実現するために，開発が進められた．そして，このワークショップは教員が自らの授業を振り返ったり，議論したりすることで，学生の学びの質を高めるための教育へ変革を起こす機会になった（Saroyan et al. 2004).

一方，日本国内では，1998年度に北海道大学が「北海道大学教育ワークショップ」を開始した.「シラバスの作成方法を実践的に学ぶことにより教員の教育能力を高めることを目的とする，1泊2日の全学FD」であり，2007年度からは，1日コースで実施していた「新任教員研修会」と統合し，研修対象をそれまでの中堅教員から若手教員（北海道大学に赴任して5年以内）へ変更して，年に2回開催している（西森ほか2012)．第20回（2012年6月実施)，第21回（2012年11月実施)，第22回（2013年6月実施）のワークショップで行われたアンケートの結果によると,「ワークショップ全体の満足度」について，第20回は31名中29名が，第21回は27名中26名が，第22回は31名全員が「とても満足」または「やや満足」と回答し（竹山ほか2014)，多くの参加者が満足しているワークショップであることがうかがえる.

愛媛大学は，マギル大学や北海道大学，徳島大学のワークショップを参考に，2002年から「愛媛大学授業デザインワークショップ」として実施している．本ワークショップは，2013年で21回を数えている．愛媛大学教育企画室WEBサイトに掲載されている第21回の授業デザインワークショップのアンケート結果によれば,「全体を通して満足できるものであった」という質問に対し，94.4％が「そう思う」,「どちらかといえばそう思う」と回答している．また自由記述では,「シラバスがどのように作成されているかを実際おこなうことで学ぶことができた」という記述があり，シラバス作成の体験を通して学びを得られた参加者がいたことが報告されている．このように，コースデザインを体系的に学ぶワークショップは，各大学とも一回の開催で終了することなく，継続的に実施されている.

大阪大学でも各大学の取り組みを参考に，現在3つのコースデザインワークショップを始めている．これまで国内で開発されてきたワークショップは，グループで同一の授業科目を設計することが課せられており，自身が担当している授業科目の設計を見直すことはワークショップ中には求められない．それゆえ，個々の授業に活かすためには，ワークショップを通して得た学びを自身の授業に転換する作業が必要となる．大阪大学でも2日間の宿泊型ワークショップは同一の授業科目を題材としている．一方，3日間の通い型のプログラムは，自身の担当している授業科目を題材に扱っている．本レポートでは，この3日間の通い型のプログラムに焦点を当て，プログラムの有用性と課題を考察することを目的とする.

2. 大阪大学コースデザインワークショップの取り組み

大阪大学は，現在，表1に示す通り，①英語版通い型4日間プログラム，②日本語版宿泊型2日間プログラム，③日本語版通い型3日間プログラムの3種類のコースデザインワークショップを展開している．いずれも，研修形態は講義およびワーク，マイクロティーチング（模擬授業）で構成されている．また，全プログラム修了者には，大阪大学理事名の修了証書が授与される.

表1　大阪大学におけるコースデザインワークショップの取り組み

	①	②	③
日数	4日間	2日間	3日間
使用言語	英語	日本語	日本語
宿泊／通い	通い	宿泊	通い
開始年度	2004年度	2013年度	2013年度
開催回数	12回	2回	2回
延べ参加者数	133名 (学内のみ)	25名 (学外含む)	23名 (学外含む)
マイクロティーチングの回数	2回	1回	1回

（2014年10月現在）

次節から3種類のワークショップの概要をそれぞれ述べる.

2.1　英語版通い型4日間プログラム

前出のマギル大学で実践されてきた5日間のCourse Design and Teaching Workshopのスタイルを踏襲し，海外から大学教育の専門家を講師に招いて,「学習者中心のアプローチ（Learner-centered approach)」について学ぶプログラムを実施している．2004年度から開始され，2014年度で12回を迎えている．2003年に大阪大学留学生センター（現在の国際教育交流センター）に

より計画が始まり，当時の大学教育実践センター（現在の全学教育推進機構）と協力しながら，学内外の予算を得て毎年実施してきた．2008年以降5年間は，前述の2部局に加えてサイバーメディアセンターが中心となり「大学教育のグローバル化に対応したFD支援事業」の一部として開催された（Ghosh Dastidar and Arikawa 2010）．2013年度からは教育学習支援センターが主催している．2004年度の開始以来，本ワークショップを評価する関係者や関連プロジェクト等の支援により毎年予算を得て継続して実施してきた．またワークショップ修了生合計130名以上の本学教員のネットワークがあり，その中から「Co-instructor」としてワークショップに協力する体制ができている．

内容は，学習者中心のアプローチに効果的なコースデザインの方法として，4日間毎日異なるテーマ（Course Content，Learning Outcomes，Instructional Strategies，Assessment Methods）について，講義を受け，自分の担当する講義のシラバスの改善を行っていく．使用言語は英語である．講師が各テーマの理論についてインタラクティブに講義を行うだけでなく，過去のワークショップ参加者であるCo-instructorから自身の担当科目でそのテーマをどのように実践しているかを聞いて学んでいく．その後，参加者は自身の担当科目において，そのテーマをどう実践できるかを，個人ワークやペアワーク，参加者全員でのディスカッションを通じて検討していく．また，午後には4日間のうち2回，5分間のマイクロティーチングを通して実践的に学んでいく．講師，Co-instructor，他の参加者が学生役となり，フィードバックのコメントをもらう．マイクロティーチングとフィードバックの風景は撮影しており，ビデオの記録をもとに，2回目のマイクロティーチングで改善していく．この4日間のプログラムの大きな特徴は，マイクロティーチングも含めすべて英語で実施すること，マイクロティーチングが2回あること，過去の参加者がCo-instructorとして講師をサポートし，自身の教育実践例の紹介およびマイクロティーチングへの助言をするために参画していることである．特に「Co-instructorの存在は，初めてワークショップに参加した者にとって親近感，安心感を与えるとともに，共通の関心を持つ大学教員間のコンタクトとネットワークの構築」に役立っている．（大阪大学大学教育のグローバル化に対応したFD支援事業WEBサイト）

2.2　日本語版宿泊型2日間プログラム

前出の愛媛大学が実施している2日間の宿泊型プログラムを踏襲し，大阪大学でも2013年度から2日間の宿泊型プログラムを開始している．3～4人を1グループとし，グループ内で同一の共通教育科目を設計するのが特徴である．シラバスや授業計画書をグループで作成するため，シラバスをまだ作成したことがない教員，あるいは教育経験が浅い教員にとって，シラバス作成の過程を最初から最後まで体験できるため，有用であると考えられる．またチームティーチングやオムニバス科目を担当している教員や，複数の教員で同一名称の科目を担当することになっている教員にとっても，グループでのシラバスづくりを体験しておくことができるため，参加を推奨している．

2.3　日本語版通い型3日間プログラム

講義の内容は2日間の宿泊型プログラムとほぼ同様であるが，3日間の通い型プログラムは，自身の授業を振り返り，シラバスや授業方法を改善することを目的としていることに違いがある．英語版の4日間のプログラムと同じく，現在担当している授業もしくは担当予定の授業が題材となるのが特徴であるといえる．

3. 方法

2014年3月18日～3月20日（以下，第1回とする）および2014年9月1日～9月3日（以下，第2回とする）に実施した2回の日本語版通い型3日間プログラムから，事後アンケートをもとに，プログラムの有用性と課題を考察する．

3.1　日本語版通い型3日間プログラムの実際

第1回および第2回の参加者の属性は表2に示したとおりである．性別，年齢，教育歴，職位ともに様々な教員が参加した．なお，職位の助教，講師，准教授，教授は特任教員や嘱託教員，客員教員を含んでいる．

参加者の募集方法は，大阪大学教育学習支援センターが年に2回発行している，大阪大学の教員向けの冊子媒体である『大阪大学FDプログラムガイド』や大阪大学教育学習支援センターのWEBサイト，学内教員向けのメール等で広報した．また，京都大学高等教育研究開発推進センターが運営している「あさがおメーリングリスト」や広島大学高等教育研究開発センターのWEBサイトに記事の掲載を依頼し，学外教員へも広報した．2014

表２　参加者の属性

		第1回（7名）	第2回（16名）	合計 度数（%）
性別	男性	3（42.9）	5（31.3）	8（34.8）
	女性	4（57.1）	11（68.8）	15（65.2）
年齢	20代	0（0.0）	2（12.5）	2（8.7）
	30代	3（42.9）	3（18.8）	6（26.1）
	40代	4（57.1）	3（18.8）	7（30.4）
	50代	0（0.0）	7（43.8）	7（30.4）
	60代	0（0.0）	1（6.3）	1（4.3）
教育歴	経験なし	0（0.0）	1（6.3）	1（4.3）
	1年未満	0（0.0）	0（0.0）	0（0.0）
	1，2年	1（14.3）	4（25.0）	5（21.7）
	3～5年	3（42.9）	4（25.0）	7（30.4）
	6～10年	2（28.6）	5（31.3）	7（30.4）
	11～15年	0（0.0）	1（6.3）	1（4.3）
	16～20年	1（14.3）	1（6.3）	2（8.7）
	21～25年	0（0.0）	0（0.0）	0（0.0）
	26年以上	0（0.0）	0（0.0）	0（0.0）
職位	非常勤講師	2（28.6）	2（12.5）	4（17.4）
	助教	1（14.3）	3（18.8）	4（17.4）
	講師	1（14.3）	4（25.0）	5（21.7）
	准教授	2（28.6）	4（25.0）	6（26.1）
	教授	1（14.3）	3（18.8）	4（17.4）

年度については大阪大学が提供している3種類のコースデザインワークショップを周知するためのリーフレットを作成した．第2回は関西地区FD連絡協議会の共催となったため，加盟校からの参加者もあった．

事前アンケートではプログラム実施前に参加者のニーズを把握するために，「学生を教育する上で悩んだり困ったりしていること」および「今回の研修で知りたい・得たい・期待していること」の2つの自由記述を設けた．その結果，授業の組み立て方や学生のモチベーションの高め方，ディベートやディスカッション，グループワーク等の授業方法の取り入れ方を学びたいという声が多く，プログラム内容と合致したニーズが挙げられていた．また，教育経験年数で比較すると，参加者の中でも比較的経験年数が長い教員は「自身の授業で改善すべき点を客観的に発見・分析」すること（11～15年）や「これまで自分なりに取り組んできたことに対する検証」（6～10年）というように，自身の授業を振り返る機会にすることも期待していた．

次に3日間の具体的なプログラムを表3に示す．プログラムはミニ講義とワーク（個人ワーク，ペアワーク，グループワーク）によって進められる．本ワークショップは，シラバスのブラッシュアップとグラフィックシラバスの作成，90分間の授業計画書の作成，10分間のミニ授業の実施を通して，学生の学習をより促すための授業のデザイン方法と基本的な教授方法を学ぶことを目的としている．

ここでは2014年度9月実施の第2回のプログラムを報告する．

1日目は，まずオリエンテーションでワークショップの目的および到達目標を確認した後，グループ内でメンバーの共通点を探し，チーム名を決めるアイスブレーキングで緊張感を和らげてスタートした．アイスブレーキングの後は，「何が学生の学びを促進するのか？」をテーマに，自身がこれまで経験してきた学びの中で，どのような学びが深い学びだったかを振り返り，グループで共有した（写真１）．そして講師の進行のもと，グループで出されたそれぞれの深い学びの経験について共通点を探った．参加者からは，自主的に参加した学習や，ゼミなど少人数で実施した学習，他者の意見で今までとは違った視点や気づきが得られた学習，実際に何かを解決した学習などが挙げられた．講師は「これらを実際の授業で実践するにはどのようにすればよいか，3日間のワークショップを通して考えましょう」と結んだ．参加者はその後シラバスの書き方に関する講義を受け，昼食休憩をはさんだ後，自身のシラバスをブラッシュアップした．次に，シラバスをより構造化させるために活用できるグラフィックシラバスの書き方に関する講義を受け，グラフィックシラバスの作成に取りかかった．先ほどブラッシュアップしたシラバスを見ながら，ポストイットを使ってグラフィックシラバスを作成した（写真2）．作成したグラフィックシラバスはペアワークにより，さらに改善し，1日目は終了となった．本ワークショップでは1日目，2日目ともに課題が課されている．1日目は，シラバスの提出である．参加者は1日目の夜までに講師に提出することとなっている．講師は提出されたシラバスにフィードバックをして，2日目に返却した．

写真１　自身が体験した深い学びの共有

表３　プログラム日程（第２回）

	時刻	内容
1日目	09:00 − 09:10	(1) 開会式 ・オリエンテーション ・研修の目的・目標の確認 ・スタッフ紹介とお願い
	09:10 − 09:45	(2) アイスブレーキング ・自己紹介・グループワーク
	09:45 − 10:45	(3) 講義Ⅰ「何が学生の学びを促進するのか？」
	10:45 − 11:00	休　憩
	11:00 − 12:00	(4) 講義Ⅱ「シラバスの書き方」 ・目的・目標の設定方法 ・コースデザイン ・評価方法の記述
	12:00 − 13:00	集合写真撮影・昼食・休憩
	13:00 − 14:15	(5) ワークⅠ「目標設定」 ・目的・目標のブラッシュアップ ・シラバス作成 ・グループワークによるブラッシュアップ
	14:15 − 14:45	(6) 講義Ⅲ「コースデザイン」 ・授業構造の可視化 ・グラフィックシラバス
	14:45 − 15:00	休　憩
	15:00 − 17:00	(7) ワークⅡ「グラフィックシラバス作成」 ・グラフィックシラバス作成 ・ペアワークによるブラッシュアップ
	17:00 − 18:30	交流会
2日目	09:00 − 10:30	(8) 講義Ⅳ「教育方法」 ・教育方法のキューブづくりとグループ内共有 ・授業での導入事例の紹介 ・教授様式の種類に関するミニレクチャ ・授業の悩み相談会
	10:30 − 10:40	休　憩
	10:40 − 11:20	(9) 講義Ⅴ「オープンコースウェア･MOOCのインパクト～いかに授業に活用するか～」
	11:20 − 12:00	(10) 講義Ⅵ「ICTを活用したアクティブラーニング事例」
	12:00 − 13:00	昼　食
	13:00 − 14:30	(11) 講義Ⅶ「学習評価の基本」 ・学習評価の目的，評価の方法と評価対象 ・様々な評価方法
	14:30 − 14:45	休　憩
	14:45 − 15:00	(12) 講義Ⅷ「クラスデザイン」 ・授業計画の立て方
	15:00 − 17:00	(13) ワークⅢ「授業計画書作成」 ・授業計画書作成 ・グループワークによるブラッシュアップ
3日目	09:00 − 10:00	(14) ワークⅣ「ミニ授業練習」 ・グループ内発表とブラッシュアップ
	10:00 − 12:30	(15) ミニ授業 ・ミニ授業（10分）＋討議・検討（20分）（1人）
	12:30 − 13:00	(16) 閉会式 ・振り返り（学んだことは何か？どう実践に活かすか？） ・修了証書授与 ・閉会の言葉

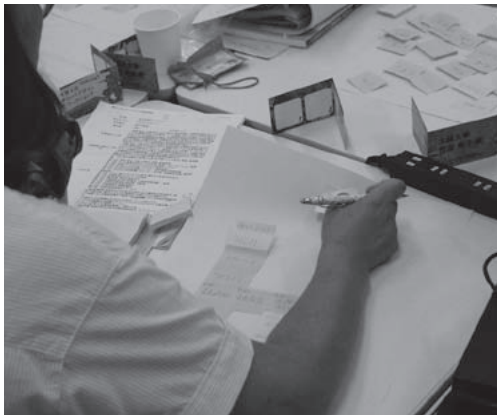

写真２　グラフィックシラバスの作成と改善

写真３　教育方法に関するサイコロトーク

写真４　ミニ授業の実施

2日目は，様々な教育方法を知るために，今まで受けてきた，あるいは実践してきた授業の中で，印象に残った教育方法を6つ書き出してサイコロを作り，7～8人程度でサイコロトークをし，共有した（写真3）．その後，まだ出てきていない教育方法について講師が紹介した．様々な教育方法の講義の後，具体的な教育方法の最新事例として，2人の別の講師が，「オープンコースウェア」と「ICTを活用したアクティブラーニング」を紹介した．昼食休憩後は，学習評価と授業計画に関する講義を受け，自身が担当している授業の1コマ（90分）分の授業計画書を個人で作成した．午前中に紹介を受けた様々な教育方法を取り入れながら授業計画書作成の作業を進め，2日目は終了となった．2日目の課題は，グラフィックシラバスと授業計画書の提出である．1日目同様，夜までに講師に提出することとなっている．講師は今までに提出されたシラバスとグラフィックシラバス，授業計画書を印刷し，3日目に参加者に配布した．

3日目のワークは10分間のミニ授業の練習と実施である．2日目に作成した90分の授業計画書をもとに，10分間の授業を実施する．参加者はまず1時間ほど各グループ内で練習した．その後グループを新しく分け，今までのグループとは異なるメンバーに学生役としてミニ授業に参加してもらい，お互い授業のフィードバックをした（写真4）．最後には修了証書が渡され，閉会式が行われた．

大阪大学で実施されているほかの2つのワークショップと同様に，ミニ授業はビデオで撮影し，後日，参加者にデータを渡している．

3.2　対象

第1回および第2回の参加者に，プログラムの開始1～2週間前に事前アンケートを，終了直後から2週間後までの間に事後アンケートを実施した．第1回の事前・事後アンケートはメールで，第2回の事前・事後アンケートはWEBアンケートを用いた．

本レポートでは第1回の参加者7名のうち，プログラムをすべて修了し事後アンケートに回答した6名と，第2回の参加者16名のうち，プログラムをすべて修了し事後アンケートに回答した13名のアンケート結果をもとに考察する．

4. 結果

本章では，事後アンケートで尋ねた「ワークショップに対する満足度」，「到達目標への到達度」，「学んだ点，今後やってみたい点」の結果について記す．

4.1　ワークショップに対する満足度

ワークショップ全体の満足度について，第1回目は「本ワークショップに参加して，どのようにお感じですか」を「たいへん満足」「満足」「どちらとも言えない」「やや不満」「不満」の5件法で尋ねた．第2回目は，大阪大学教育学習支援センターが開催している他のセミナーと

同様のアンケート項目にするため，「全体的に満足できるものであった」に対して「そう思う」「どちらかといえばそう思う」「どちらかといえばそう思わない」「そう思わない」の4件法で尋ねた．第1回の結果は図1-1，第2回の結果は図1-2に示す．

ワークショップ全体の満足度については，参加者全員が肯定的に評価していた．

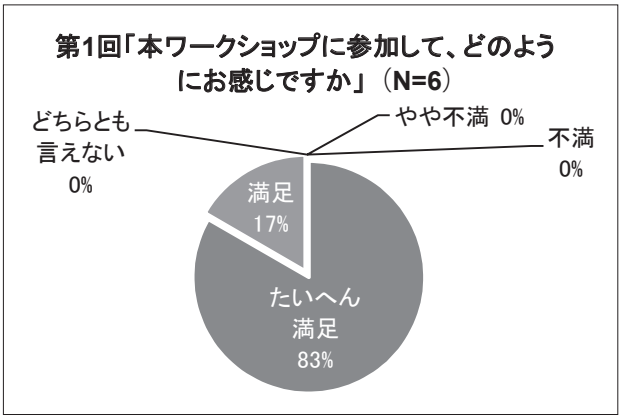

図 1-1　ワークショップに対する満足度（第 1 回）

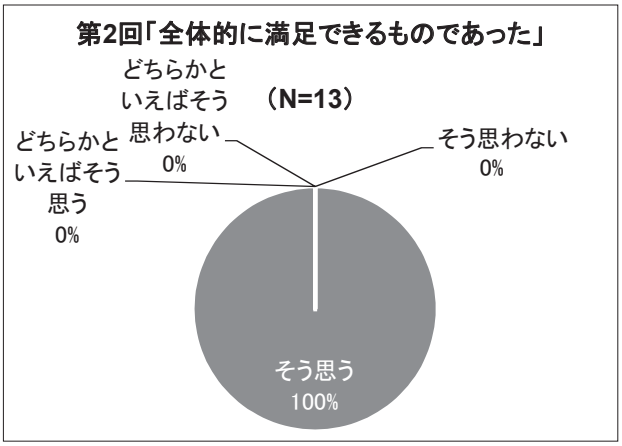

図 1-2　ワークショップに対する満足度（第 2 回）

4.2　到達目標への到達度（自己評価）

次に到達目標への到達度に関する自己評価について設問を設けた．本ワークショップは以下の6つを到達目標として掲げている．括弧内は第1回の到達目標である．

①適切に授業目的・目標を設定できる（適切な授業目的・目標設定ができるようになる）．
②自学自習を促すシラバスを書くことができる（わかりやすいシラバスを書くことができるようになる）．
③様々な授業方法の中から，目的・目標にあったものを選択できる（様々な授業方法を知り，目的・目標にあった方法を選択できるようになる）．
④様々な学習評価方法の中から，目的・目標にあったものを選択できる（様々な学習評価方法を知り，目的・目標にあった方法を選択できるようになる）．
⑤アクティブラーニングを促す教育技法を，自らの授業で導入することができる（グループ学習の手法を，自らの授業で導入することができるようになる）．
⑥継続的な授業改善に必要な部局・機関を超えた人的ネットワークを構築する（継続的な授業改善に必要な学部・研究科を超えた教員間のネットワークを構築する）．

これらの到達目標について，第1回は到達したと思うか到達しなかったと思うか2件法で尋ねた．第2回は，2件法では回答しづらいという意見があったことから，到達したかどうかについて，「そう思う」「どちらかといえばそう思う」「どちらかといえばそう思わない」「そう思わない」の4件法で回答を求めた．第1回の結果は図2-1，第2回の結果は図2-2である．

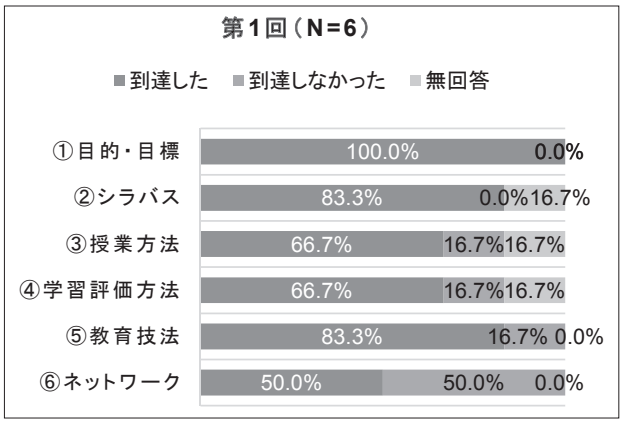

図 2-1　到達目標への到達度（第 1 回）

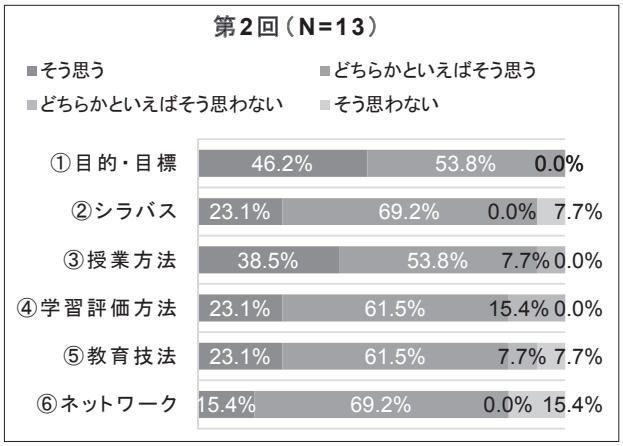

図 2-2　到達目標への到達度（第 2 回）

①授業目的・目標の設定に関しては，第1回目も第2回目も修了者全員が「到達した」，もしくは到達し

たかについて「そう思う」,「どちらかといえばそう思う」と自己評価していた.

②シラバスの作成に関しては，第1回は83.3％，第2回は92.3％の回答者が肯定的に評価していた．なお，この設問で「そう思わない」を選択した第2回の参加者は『「既に一定程度は到達している」と認識しているため』「そう思わない」と回答したことを自由記述に述べていた.

③授業方法の選択に関しては，第1回は66.7％，第2回は92.3％の回答者が肯定的に評価していた.「到達しなかった」と回答した第1回の参加者は「いろいろな方法を知りましたが，これから一つ一つ学んでいく中で，今後適切な教授法を選択できると思います」と述べていた.

④学習評価方法の選択に関しては，第1回は66.7％，第2回は84.6％の回答者が肯定的に評価していた.

⑤教育技法の導入に関しては，第1回は83.3％，第2回は84.6％の回答者が肯定的に評価していた．授業方法や学習評価方法の選択，教育技法の導入に関する到達目標への到達度に関しては，実際に取り入れてみてからでないと判断が難しいということもあると思われる.

⑥ネットワークの構築については，第1回は50.0％，第2回は78.3％が肯定的に評価した.

4.3　学んだ点，今後やってみたい点（自由記述）

「ワークショップで学んだ点」および「教育の実践の場で今後やってみたい点」を自由記述で尋ねた．表4は得られた記述内容をワークショップのプログラム内容別に分類したものである.

学んだ点を見ると，すべての項目に関して，何らかの記述があった．シラバスやグラフィックシラバス，学習評価，教育技法，クラスデザインに関する意義（重要性）と具体的な手法を学んだという記述が見られた．また，グループワークやペアワークを通じて，多様な価値観に気づいたという声も見られた.

表4　学んだ点，今後やってみたい点

項目	学んだ点	今後やってみたい点
シラバス	・シラバスは，教員の授業計画書ではなく，学生の学習を促進するためのツールだという原則が良く分かった ・シラバスの具体的な書き方を体験的に学べた	・新たに始まる他の科目に関してもシラバスのブラッシュアップを行う ・初回授業でより明確にしたシラバスの配布と説明
グラフィックシラバス	・グラフィックシラバスを作成することで，教員側の計画・意図していることが，たとえ大人数であっても伝わりやすいのではないかと思った ・グラフィックシラバスについて学べたことは大きな収穫だった	・グラフィックシラバスの提示 ・グラフィックシラバスを，マップ的に毎回の授業で活用すること ・今回作成したグラフィックシラバスを改良して，授業の中でも積極的に取り入れていきたい
目標	・授業目標の設定，および授業目標を評価と組み合わせる点は勉強になった ・授業到達目標と評価を連動させる重要性	・シラバスを修正し，目標と評価を連動させる
教育技法	・普段自分が行っていた講義は，あくまで「講義法」という教育技法の1つであり，他の教育技法と組み合わせて使うことにより，学生に深い学びを提供できる可能性が高いことに気付いた ・実際の体験から，グループワークの授業手法の良さを感じた ・MOOCやiPadを使った授業の実例についても学べ，非常に役立った	・いくつかの学んだ教育技法を取り入れること ・一方通行の講義ではなく，アクティブラーニングを促す授業を展開して学生が知識を定着させ，理解を深めることができるように取り組んでいきたい ・iPad等の活用．新たな手法を導入して，学生の集中力を高める授業をできるようにスキルを高めたい
評価	・学習評価についての考え方やその実際を学ぶことができた ・ルーブリックはこれまで作成したことがなかったので参考になった	・明確な評価基準を見せる ・ルーブリックの活用
授業計画書（クラスデザイン）	・クラスを設計する為の要点や，初期段階での設計思想をどうするかというところ	・シラバスに基づいて授業計画を書くこと
ミニ授業	・自分の授業方法の改善点（字が小さい，時間配分，アイコンタクトの仕方など）が良く分かった ・自分の強みと弱み，それをどのように改善するかという具体的な課題と克服方法	
その他	・飲み物とお菓子のコーナーが，受講者同士の交流の場になることは，あとで気付いた ・個人作業，グループ作業，プレゼン，質疑応答等を繰り返しながら多様な価値観を吸収できた ・他の先生方の話や意見，ミニ授業から新しい発見があった ・教室の設計思想も参考になった	・志しのある先生方と大学の垣根をこえて実践する授業をやってみたい ・FD学習会等を利用して，若手教員向けに今回の内容の一部をフィードバックできる機会を設定したい

今後やってみたい点を見ると，自身のシラバスの改善を挙げている記述があった．また今回扱った授業科目のみならず，ほかの授業科目のシラバス作成や，授業計画書の作成に関する記述も見られた．ほかには，今回の内容を若手教員へフィードバックすることも挙げられていた．

5. 考察

5.1 満足度の高い研修

ワークショップ全体の満足度については，第1回，第2回ともに全員が肯定的に評価していた．自らの教育実践に直結する現実的な課題に取り組むことがワークと講義を通して行われているため，高い満足度が得られたと考えらえる．「実際の体験から，クループワークの授業手法の良さを感じた」という声からは，ワークショップ自体がグループワークを体験できる仕組みになっていたことがいえるだろう．ただし，一般的に，ワークショップ型の研修は講義型の研修と比較して，参加者の満足度が高い傾向にある．また，本ワークショップは，任意参加のため，もともと教育に関心のある教員が参加している可能性が高いことも考えられる．

5.2 自身の担当科目をブラッシュアップする機会

今後やってみたいことに関する記述では，自身のシラバスをよりよくすることや，今行っている授業の教育方法を改善することが挙げられていた．また，今回扱った授業科目にとどまらず，担当している別の授業科目のシラバスの作成や，今回作成した分以外でも90分の授業計画書を作成するなど，具体的なアクションプランが示されていた．それは，特に，この3日間の通い型プログラムが2日間の宿泊型プログラムと異なり，自身の担当科目を題材としているためであると考えられる．本ワークショップは，作成したシラバスやグラフィックシラバスをそのまま現在担当している授業に活用することができる点で，有用であるといえよう．

5.3 教員間のネットワークづくりの充実の必要性

一方で，継続的な教員間のネットワークづくりの構築という点では課題が残る．「他の先生方の話や意見，ミニ授業から新しい発見があった」という声や「多様な価値観を吸収できた」という声からも分かるとおり，他の参加者との交流を通して新たな気づきや発見が得られることがある．しかしながら，本ワークショップの到達目標の一つである，「継続的な授業改善に必要な部局・機関を超えた人的ネットワークを構築する」までには至っていない．今後は，受講修了者同士の交流会の実施や，その後のフォローアップセミナーの実施等の展開も考えられる．また大阪大学ですでに行われている4日間の英語版プログラムを参考に，受講修了者にCo-instructorとして協力してもらうこともネットワーク構築に効果的な手段であるといえる．

6. まとめと今後の展望

本レポートでは，大阪大学が取り組んでいる3つのコースデザインワークショップのなかで，3日間の日本語版通い型プログラムに焦点を当て，プログラムの効果と課題を考察することを目的とした．事後アンケートの結果から，修了者のワークショップに対する満足度の高さがうかがえた．また，ワークショップは，自身が担当している，ある一つの科目を振り返る機会となるだけでなく，担当している別の科目までをも視野に入れた具体的なアクションプランを立てられる機会となっていたことがわかった．さらに，グループやペアで話し合う場は，新たな発見や気づきが得られる場になっていた．その交流を継続的なネットワークづくりに発展できるよう検討していくことで，より充実したワークショップにしていくことができると考えられる．

本レポートはプログラム終了直後のアンケートをもとに考察したが，北海道大学教育ワークショップの参加者へのフォローアップ調査（山岸2012）などのように，継続的な効果検証も必要である．また，大阪大学では前述のとおり，3種類のプログラムを実施している．他のプログラムとの比較検討や，参加者の教育歴ごとの比較検討を通し，参加者の対象を絞った，より効果的なプログラムの開発にもつなげていきたい．

受付2014.11.21／受理2015.02.07

参考文献

（WEBサイトは2014年11月20日閲覧）

Ghosh Dastidar, Debashrita. and Arikawa, Tomoko.（2010）Future trajectory of Faculty Development in Osaka University. *ICED*（*International Consortium for Educational Development*）*Conference* 2010 *Abstracts*. p.36.

Saroyan, A., Amundsen, C., Weston, C., McAlpine, L., Winer,

L., Cowan, S. and Gandell, T.（2004）The course design and teaching workshop: Why and what? In Saroyan,A. and Amundsen, C. (Eds.) *Rethinking teaching in higher education: From a course design workshop to a faculty development framework* . Sterling, VA: Stylus Publishing. pp. 3-14

有川友子（2004）「大阪大学における教育の国際化への取り組み―「教育の国際化推進のためのFD事業：英語による講義のためのワークショップ」を終えて―」『大阪大学大学教育実践センター紀要』1, pp.97-105

愛媛大学教育・学生支援機構（2009）『FD担当者必携マニュアル 第4巻 教育企画室コースデザイン・教授法ワークショップとFDネットワーク』

愛媛大学教育企画室「第21回愛媛大学授業デザインワークショップ」http://web.opar.ehime-u.ac.jp/event/file/ws21_h25.pdf

大阪大学 大学教育のグローバル化に対応したFD支援事業「FDワークショップ」http://gfd.ime.cmc.osaka-u.ac.jp/main/fd

西森敏之・安藤厚・細川敏幸・山田邦雅・山岸みどり・鈴木誠・池田文人・三上直之（2012）「平成22年度および23年度の北海道大学教育ワークショップ報告」北海道大学高等教育推進機構『高等教育ジャーナル：高等教育と生涯学習』19, pp.93-142

竹山幸作・細川敏幸・山田邦雅・山岸みどり・鈴木誠・三上直之（2014）「北海道大学教育ワークショップ報告（第20~22回）」北海道大学高等教育推進機構『高等教育ジャーナル：高等教育と生涯学習』21, pp.91-116

山岸みどり（2012）「北海道大学における授業開発コンサルタントの将来性」安藤厚・細川敏幸・山岸みどり・小笠原正明編著『プロフェッショナル・ディベロップメント－大学教員・TA研修の国際比較』北海道大学出版会, pp.203-214